

基礎研究部門 特定公募研究（共同研究）

釈尊絵伝における「降兜率」と「從忉利天降下」

岡 本 健 資

1. 釈尊絵伝について

多田等観（浄土真宗本願寺派の僧。1890-1967）は、当時、浄土真宗本願寺派の第22世門主であった大谷光瑞の指示により、1913年からの約10年間にチベット僧として過ごし、1923年に日本に帰国した¹⁾。1936年（1937年（?））、日本の多田のもとに、釈迦牟尼の生涯における出来事約120場面が描かれた仏伝図（計25幅（?）²⁾）が贈られてきた。これはダライ・ラマ13世（1876-1933）の遺言にしたがい贈られたもので、多田が日本に帰国する前、ダライ・ラマ13世から下賜品について尋ねられた際に所望していたものであった。この仏伝図は「釈迦牟尼世尊絵伝」と呼ばれ、現在、岩手県の花巻市博物館が収蔵する。この「釈迦牟尼世尊絵伝」は「釈尊絵伝」とも略称されるため、以下、本稿でも便宜的にこの呼称を用いる。

さて、「釈尊絵伝」は、上述の通り、大部の釈迦牟尼についての仏伝図群である。そのサイズについては、各幅の「絵像が描き込まれている箇所」の寸法は皆ほぼ等しく、縦約78センチメートル、横約54センチメートルである。

「釈尊絵伝」に対する研究は、1996年に発表された、奥山直司らによる研究（『釈尊絵伝（多田等観請来仏伝図複製）』学習研究社）が、現段階で最も詳しいものと言える。近年、A. Quintman と K. R. Schaeffer が、チベット仏教のチョナン（Jo nang）派の僧ターラナータ（Tāranātha：1575-1638）が1615年に建設に着手したチベット自治区ツァン（Gtsang）地方にある僧院タクテン・プンツォクリン（Rtag brtan Phun tshogs gling）のある壁画の調査研究を行っており（Quintman-Schaeffer 2015：32-73）、その壁画は「釈尊絵伝」と底本を同じくすることが判っている。

「釈尊絵伝」の底本が判明した理由は、各場面に、金泥で簡潔に書き込まれた「詞書」が、上述のターラナータが著した以下の仏伝における各場面のタイトル部分と概ね一致するからである³⁾。その仏伝とは、『世尊牟尼王の御行の略説、〈見ることで利益があり歓喜を伴うことから信の太陽が百方に昇る〉と名づくるもの⁴⁾（*Bcom ldan 'das thub pa'i dbang po'i mdzad pa mdo tsam brjod pa mthong bas don ldan rab tu dga' ba dang bcas pas dad pa'i nyin byed phyogs brgyar*

‘*char ba zhes bya ba*’) (以下、『御行の略説』)である。

また、奥山(1991)は、各場面における「絵画」表現は、同じくターラナータの作である『尊師釈迦王の百行の作画録⁵⁾ (*Ston pa Śākya'i dbang po'i mdzad pa brgya pa'i bris yig*)』(以下、『作画録』)に依拠すると指摘する⁶⁾。さらに、奥山(1991)は、『御行の略説』と『作画録』を底本とする以上、「釈尊絵伝」の成立は1610年代を遡らず⁷⁾、17世紀あるいは18世紀頃の作と推測する⁸⁾。

2. 釈尊絵伝における「降兜率」と「從切利天降下」の位置

「釈尊絵伝」は現在、計25幅から成るが、その内訳は、まず釈迦牟尼の事績が描き込まれない「本尊」1幅と「本尊エクストラ」と呼ばれる1幅、それに、右1図から右12図までの12幅、そして、左1図から左12図までの11幅(内、左4図が欠落しているため)である⁹⁾。各「幅」と本尊との位置関係を表すると以下になる。

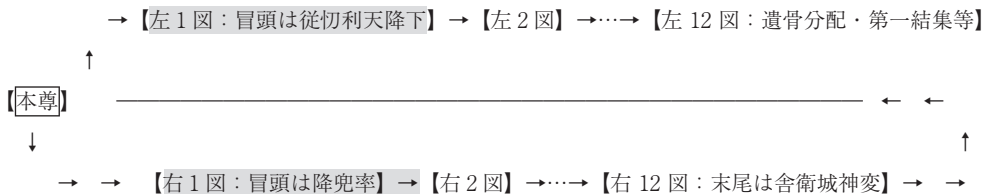
場面展開の順番

右図は、各幅中央の仏坐像を中心におおむね左回りに場面が展開、左図は、仏坐像を中心にして右回りに場面が展開



(龍谷ミュージアム2014: 96)

このように、「釈尊絵伝」は本来、本尊を描いた1幅を中心に(本尊の視点で見て)左右12幅ずつ展開する(左4図は欠落)。描かれる内容は、右1図の冒頭に来る「兜率天上の菩薩・白象入胎」(以下、「降兜率」と略す)から始まり、右12図の末尾に置かれる「舍衛城の神変」で終わり、続いて、左1図の「為母說法・從切利天降下」(「從切利天降下」と略す)に繋がり、左11図(涅槃)および左12図(遺骨分配と第一結集。それ以降)を描いて完了する。ほぼ時系列に沿って、釈尊の誕生から涅槃までに焦点が当てられた一代記的な構成となっている。つまり、以下の様に図示できる。



筆者はこれまで、「釈尊絵伝」を構成する事績間の関係と、各図の配置に注目してきた。例えば、仏伝を描いた右1図の冒頭における「降兜率」の位置は、最後の左12図「遺骨分配と第一結集。それ以降」と対照すれば「一代記的仏伝」を志向する作品だと判る。また、右図の最後であ

る右12図末尾の「舎衛城の神変」と左1図冒頭の「從忉利天降下」との関係にも注目し、検討したこともある（岡本 2018）。右12図と左1図は、右図から左図へ繋がる重要な位置にあるため、両事績の配置が意図的であるか否かを探った。結果、両事績すなわち「舎衛城の神変」（右12図末尾）と「從忉利天降下」（左1図冒頭）が、右図から左図への連結を円滑にするために意図的に配置された可能性を提示した。理由は、いくつかの文献において、両事績は密接に結びつくものとして扱われていたためである。なかには、両事績の間に因果関係（「舎衛城の神変」によって出家者たちが墮落したため、釈尊が天界へ移動し、地上から姿を消した）が存在した。そこで、右12図末尾と左1図冒頭に連続性の強い事績を両図に分割して描いた可能性を指摘した。

そして今回は、上述の検討に続き、「釈尊絵伝」における、重要な位置にあるふたつの図の冒頭の事績を検討したい。すなわち、右1図の「降兜率」と左1図「從忉利天降下」との2つの事績である。これら両事績はともに、「本尊」から見て、両翼に連続して展開してゆく右図と左図の「始まり」に位置し、「本尊に最も近い図」のさらに「冒頭」という特別な位置にある。また、後に釈迦牟尼となる菩薩（シュヴェータケートゥ）と釈迦牟尼自身が、兜率天と忉利天という天界の違いはあるが、いずれも「仏不在の地上へと天界から降りてくる」という点で一致する。以下、両事績の類似性が、この配置が選択された理由であったのではないか、という仮説のもとに事績を比較してみたい。

3. 類似する要素

「釈尊絵伝」の底本は、ターラナータ作の『御行の略説』と『作画録』であるが、それら（特に、仏伝である『御行の略説』）が基礎としている文献の大部分が、説一切有部の律、特に『根本説一切有部毘奈耶破僧事』（T. 24：no. 1450）と『根本説一切有部毘奈耶雜事』（T. 24：no. 1451）であることが判っている（奥山1996：76-78）。



図Ⅰ 花巻市博物館蔵「釈尊絵伝」 右1図上方。兜率天上の菩薩。



図Ⅱ 「釈尊絵伝」 右1図下方左。
マーヤーを護衛する四天子。



図Ⅲ 「釈尊絵伝」 右1図下方右。
菩薩を抱きとめる女形の帝釈天。

帝釈天の行動

『御行の略説』の「降兜率」と「從忉利天降下」において、似た役割を果たす「帝釈天（シヤクラ：インドラ）」について確認する。帝釈天は、両事績において、菩薩（あるいは釈尊）が天界から降下する際、あるいはその前後に登場し、「露払い」のような役割を果たす。

「降兜率」では、菩薩がマハーマーヤーを母として「兜率天」から下生することを決意すると、帝釈天は彼女のもとへ行って母胎を浄め¹⁰⁾、また、菩薩の入胎後は、天子四人に彼女を護衛させる¹¹⁾（図Ⅱ）。また、菩薩のお産の際には、恥じらう彼女のために風雨を起こし人々を遠ざけ、自らの姿を産婆に変えて側に立ったという¹²⁾。そして、菩薩が誕生する際には、鹿の皮でもって受け止める¹³⁾（図Ⅲ）。重要な場面で、帝釈天が介助者として登場する。

一方、「從忉利天降下」でも、釈尊が生母マーヤーに法を説くために滞在していた場所は帝釈天が支配する「忉利天（三十三天）」である。当然、帝釈天は聞法場に居るが、それだけでなく、釈尊が地上の信者たちによる帰還の願いを聞き入れ、忉利天（三十三天）から降りて地上に戻ることを決意すると、帝釈天は、釈尊が地上に降りるための階段（中央は瑠璃製、右は黄金製、左は水晶製）を作るよう指示する¹⁴⁾（図Ⅴ）。そして、釈尊が天界から地上へ降りる際には、帝釈天自ら、傘蓋を釈尊へ差し掛けて随伴する¹⁵⁾（図Ⅴ）。梵天も登場するが、帝釈天に比べると言及は僅かである。

天界での説法

「降兜率」では、兜率天において、[後の釈尊は] 一生補処（*skye ba gcig gis thogs pa'i*）の菩薩となり、兜率天の神々などに正法を説いた（*yang dag pa'i chos ston par mdzad do*）とされる¹⁶⁾。一方、「從忉利天降下」でも、釈尊が忉利天（三十三天）にて神々や生母（＝マーヤー）

などに説法する¹⁷⁾。天界説法は「從忉利天降下」の核心とも言える部分であるため、いずれの資料にも記載される。

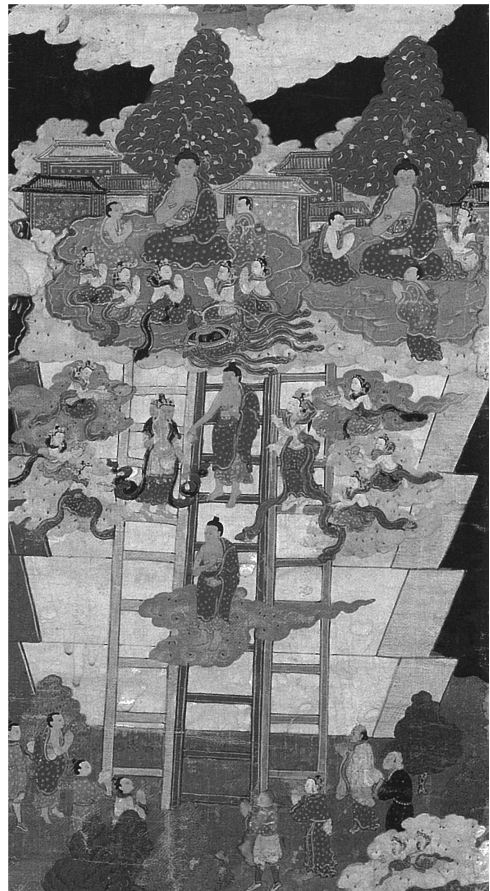
地上の好ましくない様子

「降兜率」では、菩薩が地上に降りようとする際、神々は菩薩に翻意させようとして、「菩薩は明察ください。今日、地上は悪徳が積み重なり人々は不品行です¹⁸⁾」と述べる。

一方、「從忉利天降下」においても、釈尊は、地上が好ましくない状態に陥ったため、忉利天に昇ったとされている。「釈尊絵伝」では、文脈上、「舍衛城の神変」（釈尊が大神変を示現して六師外道を調伏する話）に連なる話として「從忉利天降下」が描かれている。「從忉利天降下」の冒頭では、人々が釈尊によるその偉大な神変に心を奪われ、比丘たちへの過度の尊敬と布施が（図Ⅳ）、比丘たちを出離から妨げていると知ったため¹⁹⁾、また、生母マヤーへの説法のために、釈尊は忉利天へ向かったとされる。つまり、地上が好ましくない環境に陥っていたとされている



図Ⅳ 花巻市博物館蔵「釈尊絵伝」
左1図上方中央。布施物で満たされた僧院。



図Ⅴ 花巻市博物館蔵「釈尊絵伝」
左1図下方右。忉利天での説法と降下。

点で、「降兜率」と類似する。

以上のように、右1図冒頭「降兜率」と左1図冒頭「從忉利天降下」との両事績には、菩薩または釈尊が「天界から地上へ降下し現れる」ということ以外にも共通点がある。このような類似点は、「釈尊絵伝」、その底本『御行の略説』に先行する資料において、両事績が何らかの関係を有することを推測させる。

4. 「釈尊絵伝」に先行する両事績の関係

兜率天からの降下を詠う舍利弗

パーリ三蔵に含まれる *Dhammapada* の註釈書 *Dhammapadatṭhakathā*（以下、DhpA）は、5世紀前半のブッダゴサの作だが、そこに「從忉利天降下」の事績が含まれている。忉利天から地上へ釈尊が降下した際、サーリブッタ長老が地上で最初に釈尊を出迎えた者となる。そして、その内容を記す散文の中に、舍利弗が詠った詩節が挿入される。以下がその記述である。

satthā iminā parivārena saddhim otaritvā saṃkassanagaradvāre patiṭṭhāhi.
sāriputtatthero pi āgantvā satthāraṃ vanditvā yasmā tena tathārūpāya buddhasiriya
otaranto satthā ito pubbe na diṭṭhapubbo tasmā
‘na me diṭṭho pubbe na-ssuto uda kassaci
evaṃ vagguvado satthā tuṣitā gaṇimāgato’ ti (DhpA, p. 226, l. 2-8)

師は、この眷属とともに降りて後、サンカッサ市の入り口に立った。サーリブッタ長老も、師に礼拝したが、彼は、そのような仏の吉祥さを伴って降下しつつある師を、かつて見たことが無かった。それゆえ、

「私はかつて見たことが無い。また、誰からも聞いたことが無い。このように、妙なることを語る師が、兜率 [天] から、集団を有し到来したのを」と [詠われる]。

上記引用中の末尾の詩節は、釈尊が「忉利天から」降下するのを見たサーリブッタが詠った詩節だとされている。しかし、既に論じたことがあるが（岡本2017）、詩節の中では、「兜率 [天] から (tuṣitā)」となっており、「忉利天から」降りてきたとする散文の文脈と一致しない。この詩節は、以下の通り、*Suttanipāta* の *Aṭṭhakavagga* においてサーリブッタに関する箇所第955詩節と殆どそのまま一致する。違いは「今より (ito)」という語と「具寿サーリブッタは以下の様に [言った] (icc-āyasmā sāriputto)」という文章が *Suttanipāta* に加わるだけである。

“na me diṭṭho ito pubbe icc-āyasmā sāriputto na-ssuto uda kassa ci
evaṃ vagguvado satthā tuṣitā gaṇi-m-āgato (*Suttanipāta*, v. 955).

具寿サーリブッタは [言った。]「私はかつて見たことが無い。また、誰からも聞いたことが

無い。このように、妙なることを語る師が、兜率〔天〕から、集団を有し到来したのを」と。

Suttanipāta では、この詩節の前後に、釈尊が「忉利天から」地上に降下したことにする説明は無い。故に、DhpA のように、「兜率〔天〕から (*tuṣitā*)」という句には問題は生じない。それでは、*Suttanipāta* の註釈書 *Paramattha-jotikā* (以下、Pj) ではどうか。忉利天から降下した釈尊を出迎える人物として、サーリプッタと、DhpA には登場しないウッバラヴァンナー尼を記すものの、Pj でもこの問題は回避できていない。

sopāṇakaḷevare t̥hitam pana bhagavantam sabbapaṭhamam āyasmā sārīputto vandi, tato
uppalavaṇṇā bhikkhunī, athāparo janakāyo. (Pj, p. 570, l. 20-23)

また、階梯の上に立った世尊を、まず最初にサーリプッタ具寿が礼拝した。それから、ウッバラヴァンナー比丘尼が、そして、他の人々が〔礼拝した〕。

Pj では、この記述の後、釈尊がサーリプッタの徳とそれを示すための過去世物語を語る。その後、既に引用した DhpA と同じ詩節 (*Suttanipāta*, v. 955) を記し、その註釈も記される。つまり、DhpA と同様に、釈尊が「忉利天から」の降下の際に、サーリプッタは、釈尊の「兜率天から」の到来を詠う。従って、DhpA と大差ないと言える²⁰⁾。しかし、この「從忉利天降下」の事績に、この詩節が必須かと言えば、そうではない。実際、*Jātaka-Atthakathā* (以下、JA)、いわゆるパーリ・ジャータカは、DhpA と同様に地上で釈尊を迎えるのはサーリプッタだが、この詩節は引用されない。JA では以下の通り。

satt̥hāraṃ dhurasopāne patiṭṭitam paṭhamam eva sārīputtatthero vandi, pacchā
sesapariṣā. (JA, Sarabhamigajātaka (no. 483), p. 266, l. 5-6)

末端部の階梯に立った師を、最初にサーリプッタ上座が礼拝した。残りの眷属が、〔それに〕続いた。

漢訳資料に目を転じると、「從忉利天降下」において、サーリプッタが地上で釈尊を迎える資料は少ない。この詩節を伴うものとしては、3世紀に訳された『義足経』が最も古いと考えられる。もちろん、この経は *Suttanipāta* の *Atthakavagga* の註釈にあたるので、パーリ資料と出自が全く異なる伝承とは言えない。ともあれ、同経では、釈尊が地上に降下する時に言及される比丘は「蓮華色比丘尼」(パーリ文献におけるウッバラヴァンナー比丘尼)、そして「一比丘」という固有名詞を持たぬ出家者である²¹⁾。この「一比丘」はサーリプッタではない。というのも、『義足経』では、釈尊の降下後に、舍利弗(=サーリプッタ)が登場し、釈尊と詩のやり取りを行うからである。つまり、同経では、釈尊が忉利天から地上へ降下した後、人々に対する説法を終える。その後、ある賢者が仏を讃える多数の詩節を詠う。それから、舍利弗が詩節群を詠うが、その冒頭が *Suttanipāta* 第955詩節、すなわち、DhpA や Pj が引用するものと同様の詩節である。

… 是時賢者舍利弗。在衆中坐。便起座。偏袒叉手。以偈歎曰

未嘗見有是者 未嘗聞有說者

尊如是威神天 從兜術來至是

(『義足經』 T. no. 198, p. 186b)

DhpA や Pj, JA が、釈尊の地上への降下直後に現れる人物として、舍利弗（サーリプッタ）に焦点をあてるのに対して、『義足經』は、舍利弗を降下直後には登場させず、賢者による讃仏の詩節を介在させるなど、しばらく間を置いて舍利弗を登場させている。それにより、釈尊が「忉利天から」来下する目の前で、「兜率天から」と詠じることに対する不自然さは希薄化している。しかし、「忉利天から」の釈尊の来下を見ながらであれ、あるいは、しばらく間をおいてからであれ、サーリプッタ（舍利弗）が「兜率天から」の来下についての詩節を詠じる記述を、「從忉利天降下」の事績の中に置いたことは、これらの仏典を編纂した者たち（あるいは舍利弗自身）にとって、「從忉利天降下」の事績が、「降兜率」の事績を連想させるものであったためであろう。仏教徒にとって、両事績は、それほど関係深いものである。

結 び

「釈尊絵伝」右1図の「降兜率」と、左1図「從忉利天降下」との2つの事績は、「本尊」から見て、両翼に連続して展開してゆく右図と左図の「始まり」に位置し、「本尊に最も近い図」の内でも「冒頭」という特別な位置にある事績である。「後に釈迦牟尼となる菩薩」と「釈迦牟尼自身」つまり現在する菩薩と仏が、兜率天と忉利天という別の天界からではあるが、いずれも「仏不在の地上へと天界から降りてくる」というテーマは、時代を問わず、仏教徒の一致した関心事だったと考えられる。本研究では、このような両事績の類似性が、この配置が選択された理由だったのではないかと、という仮説のもとに事績を比較した。

結果として、「釈尊絵伝」の底本である『御行の略説』を比較すると、上述のテーマの類似性以外にも、帝釈天の行動などに類似性が見いだせた。

さらに、「從忉利天降下」を掲載するいくつかの資料の中で、釈尊が「忉利天から」降下した際に仏弟子サーリプッタ（舍利弗）が「降兜率」の事績を詠ったとみられる詩節が存在し、その重要性を、「釈尊絵伝」における事績の配置という視点から確認できた。仏教徒は、これら2つの事績を、仏伝中のかなり時間を隔てた出来事であるにも関わらず、特に関係が深いものとして認識していたと考えられる。

以上のことから、仏教徒が抱いていた両事績の連関性が、「釈尊絵伝」やその底本『御行の略説』に影響を与え、右1図と左1図の冒頭に両事績が配置されるに至った可能性を指摘できる。

[謝辞] 本稿の内容については、かつて故畝部俊也博士より貴重なご教示を賜りました。ここに

記して甚深の謝意を表します。

註

- 1) 多田等観（今枝由郎監修）（2007）『多田等観全集』pp. 235, 317.
- 2) 「絵伝の到着直後に、多田は「二十五幅揃」と手紙に書」いている（奥山1996：67）。したがって、絵伝が日本に届いた時点で、既にこの25幅だけだった可能性がある。「釈尊絵伝」の底本であるターラナータ作の『御行の略説』及び『作画録』との比較した奥山は、「左4図」が欠落していると推測する（奥山1996：67）。
- 3) 奥山1996：78。
- 4) Quintman と Schaeffer はこのテキストが1621年に書かれたとする（Quintman-Schaeffer 2015：34）。このテキストは、『チョナン百御行（Jo nang mdzad brgya）』とも（奥山 1996：73）、あるいは、単に『百行（mdzad brgya）』と呼ばれることもある（Quintman-Schaeffer 2015：35）。題名の和訳は奥山訳を参考にした。また、このテキストの引用の際に用いるテキストは次の通り。*The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranātha* (*Reproduced from a set of prints from the Rtag-brtan Phun-tshogs-gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak*), volume 12, published by Namgyal and Tsewang Taru, Leh: Ladakh, 1985. このテキストには、幾つもの版が存在している。Quintman と Schaeffer が使用する版での題名は *Bcom ldan 'das dpal rgyal ba shākya thub pa shākya sengge'i rgyal po gang de'i mdzad pa mdo tsam brjod pa mthong bas don ldan rab tu dga' ba dang bcas pas dad pa'i nyin byed phyogs brgyar 'char ba* であり、ここで扱う版と題名が僅かに違う。今回は、それら別の題名を持つ版を対照することはできなかった。版本については Quintman と Schaeffer による研究を参照頂きたい（Quintman-Schaeffer 2015：34, 69）。
- 5) 『御行の略説』と同じく、*The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranātha* の volume 12 に所載。
- 6) 奥山1991：27-42、特に31。
- 7) 奥山によれば、『作画録』の奥書に、シガツェに君臨したツァン王ブンツォクナムギェル（在位 1611-1620）の勧めで『作画録』を述作した旨の記述があり、また、Champa（1977）によれば、ターラナータが1617年に『尊師の伝記』（*Ston pa'i rnam thar*）という書をツァン王に献じており、これが『御行の略説』である可能性があるためとする（奥山1996：74）。
- 8) 『御行の略説』と『作画録』の関係について、「先後関係は必ずしも明らかではない。また、この両者は、『ターラナータの伝』を『作画録』が短くまとめた、といった単純な関係で結ばれているのでもない（奥山1996：76）」とし、『御行の略説』（＝『ターラナータの伝』）に見られない要素が『作画録』に存在することや、逆に『御行の略説』の第37、49、59、62-66、125話（計9話）が、『作画録』と「釈尊絵伝」の両方に存在しないことを指摘する。これら三者の関係は未だ不明な点が多い。
- 9) 奥山（1996：67）は、「左4図」が欠落したと推測する。おそらく、この推測は正しい。なぜなら、かつてチョナン派の寺院であった「タクテン・ブンツォクリン寺」には、『釈尊絵伝』と底本を同じくする壁画が残っており、そこには奥山が欠落した「左4図」に描かれていたと推定する内容が、実際に存在するからである（岡本2018）。次に、各幅の順序については、いくつかの画布の下辺余白部分に、「右の第6」などの記載が残る場合もあり、底本とされるターラナータ作のテキストの内容からも判明する。このあたりのことについては、すでに奥山（1996）が指摘している。
- 10) lhums kyang gtsang mar byas so //（『御行の略説』7b3）。
- 11) lha'i bu dpa' zhing brtul phod pa bzhi bzahag go //（『御行の略説』7b7）。
- 12) brgya byin gyis bsams pa / yum 'di ni ngo tsha shes pa dang ldan pas thabs shig bya'o snyam rlung dang char drag btang bas skye bo'i tshogs rnams gud du song ba na // brgya byin

- bdag nyid ma ma rgan mo'i cha byad du sprul nas mdun du bsad do // (『御行の略説』 8b3-4)。
- 13) de nas brgya byin gyis ri dwags kyi pags pa'i sle mas byang chub sems dpa'i sku bzung bar brtsams pa la / (『御行の略説』 8b5-6)。
- 14) sum cu rtsa gsum nas jambu'i gling gi bar la / dbus su baidurya'i skas dang / gyas su gser dang / gyon du shel gyi skas byas / (『御行の略説』 87b4)。
- 15) brgya byin ni gdugs rtsib ma stong dang lhan pa 'dzin cing /shel gyi skas las 'bab bzhin du / (『御行の略説』 87b5)。
- 16) de nas 'phos te dga' ldan gyi lha rnams kyi ston pa byang chub sems dpa' dam pa dog dkar po zhes bya bar gyur te / skye ba gcig gis thogs pa'i byang chub sems dpa'i tshul bzung nas / dga' ldan na gnas pa rnams gtso cher gyur pa'i lha la sogs pa'i 'gro ba rnams rab tu smin pa'i phyir / dga' ldan na gnas pa rnams gtso cher gyur pa'i lha la sogs pa'i 'gro ba rnams rab tu smin pa'i phyir / yang dag pa'i chos ston par mdzad do / (『御行の略説』 5b1-2)。
- 17) yum la sogs pa lha rnams la chos ston par mdzad do / (『御行の略説』 87a2)。
- 18) byang chub sems dpa' mkhyen par mdzod cig / da lta 'jig rten ni sdiag pas sogs pa / skye dgu ni ma rungs pa'o // (『御行の略説』 6b6)。
- 19) der dge slong rnams rnyed bgur mang zhing ches mang bas / so so skye bo rnams kyi spong ba la bar du gcod par gyur ba gzigs nas / (『御行の略説』 86b7)。
- 20) この詩節に忉利天への言及が無く、兜率天のみに言及されることが不自然なことは、Pj や Mahāniddeśa の編纂者たちが、この詩節における tusita に対する解釈を多数並記している点からも判る。Mahāniddeśa では次の様に複数の解釈が並記される。... tusitā gaṇi-m-āgato ti bhagavā tusitā kāyā cavitvā sato sampajāno mātukucchiṃ okkanto ti, evam pi tusitā gaṇi-m-āgato. athavā tusitā vuccanti devā. te tuṭṭhā santuṭṭhā attamanā pamuditā pītisomanassajātā, tusitadevalokato gaṇi-m-āgato ti, evam pi tusitā gaṇi-m-āgato. athavā tusitā vuccanti arahanto. te tuṭṭhā santuṭṭhā attamanā paripuṇṇasamkappā arahantānaṃ gaṇi-m-āgato ti, evam pi tusitā gaṇi-m-āgato. (Mahāniddeśa, p. 446, l. 29 – p. 447, l. 6). また Pj でも、同様に解釈が並記される。tatha ito *pubbe* ti ito samkassanagare otaraṇato pubbe; vagguvado ti sundaravado; tusitā gaṇi-m-āgato ti tusitā kāyā cavitvā mātukucchiṃ āgatattā tusitā āgato, gaṇā-cariyattā gaṇi, santuṭṭhaṭṭhena vā tusitasamkhātā devalokā gaṇi āgato; tusitā (naṃ) vā arahantānaṃ gaṇi āgato ti. (Pj, p. 571, l. 26-31)。
- 21) 『義足經』における釈尊の降下直後に登場する二人の出家者の描写は次のとおり。「是使無數人民悉來會。欲見佛。欲聞法。是時蓮花色比丘尼。化作金輪王服。七寶導前。從衆力士兵。飛來趣佛。是大衆人民。及長者帝王遙見金輪王悉下。道不敢當。前廣作徑路。蓮花色比丘尼到佛所。是時天亦見人。人亦悉見天。以佛威神。天爲下。地爲高。人悉等。天亦無貪意在人。人亦無貪意在天。時有人貪著樂金輪王。是時有一比丘。坐去佛不遠。便箕坐直身。意著撿戒。比丘見天樂會亦人樂會。自生念言。是一切無常。一切苦。一切空。一切非我何貪是。何願是。已是何有。比丘即在坐得溝港道。已自證。」(『義足經』 T. no. 198, p. 185c)

略号及び参考文献

- DhpA (*Dhammapadaṭṭhakathā*) = *The Commentary on the Dhammapada*, H. C. Norman (ed.), vol. III, London: PTS, 1906, rep. Oxford: PTS, 1993.
- JA (*Jātaka-Atṭhakathā*) = *The Jātaka together with its Commentary*, V. Fausbøll (ed.), vol. IV, London: Trübner & Co., 1887, rep. Oxford: PTS, 1991.
- Pj (*Paramattha-jotikā*) = *Sutta-Niṭṭa Commentary II being Paramatthajotikā II*, 2, Helmer Smith (ed.), London: PTS, 1917, rep. Oxford: PTS, 1989.

※一次資料については、特に明記がない場合は Pali Text Society 版を用いた。

T = 『大正新脩大藏經』, 東京: 大蔵出版。

『御行の略説』 = Bcom ldan 'das thub pa'i dbang po'i mdzad pa mdo tsam brjod pa mthong bas don ldan rab tu dga' ba dang bcas pas dad pa'i nyin byed phyogs brgyar 'char ba zhes bya ba, in *The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranātha (Reproduced from a set of prints from the Rtag-brtan Phun-tshogs-gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak)*, volume 12, published by Namgyal and Tsewang Taru, Leh: Ladakh, 1985.

『作画録』 = Ston pa shākya'i dbang po'i mdzad pa brgya pa'i bris yig, in *The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranātha (Reproduced from a set of prints from the Rtag-brtan Phun-tshogs-gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak)*, volume 12, published by Namgyal and Tsewang Taru, Leh: Ladakh, 1985.

Quintman, Andrew and Schaeffer, Kurtis R. (2015) The Life of the Buddha at Rtag brtan Phun tshogs gling Monastery in Text, Image, and Institution: A Preliminary Overview, *Journal of Tibetology* (= 『藏学学刊』), vol. 13, pp. 32-73.

及川真介 (訳注) (2015) 『仏の真理のことは註: ダンマパダ・アッタカター』 春秋社。

岡本健資 (2017) 「*Dhammapada-Aṭṭhakathā* における「三法宝階降下」について」『パーリ学仏教文化学』第31号、pp. 51-72.

岡本健資 (2018) Paintings of Princess Muktālatā's Conversion Story: A Comparative Study of the Shakuson Eden and the Rtag brtan Phun tshogs gling Monastery's Mural, *Journal of World Buddhist Cultures* vol. 1, pp. 33-58.

岡本健資 (2018) 「多田等親請来「釈迦牟尼世尊絵伝」に関する考察」森雅秀 (編) 『アジア仏教美術論集 中央アジアⅡ: チベット』中央公論美術出版、pp. 369-391.

奥山直司 (1991) 「多田等親請来仏伝図タンカについて」『密教図像』10号、pp. 27-42.

奥山直司 (1996) 「多田等親請来「釈尊絵伝」について」『釈尊絵伝 (多田等親請来仏伝図複製)』 ([図解編] 奥山直司 / [解説編] 中村元・山口瑞鳳・松長有慶・奈良康明・山折哲雄・宮治昭・奥山直司)、学習研究社、pp. 62-87.

多田等親 (著)・今枝由郎 (監修) (2007) 『多田等親全文集: チベット仏教と文化 (全一卷)』白水社。

宮治昭 (2010) 『インド仏教美術史論』中央公論美術出版。

村上真完・及川真介 (訳注) (2009) 『仏のことは註: パラマッタ・ジョーティカー』春秋社。

森章司・本澤綱夫・岩井昌悟 (2000) 「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」『中央学術研究所紀要』(モノグラフ篇 No.3)。

龍谷ミュージアム・産経新聞社・京都新聞編 (2014) 『特別展「チベットの仏教世界: もうひとつの大谷探検隊」』龍谷大学龍谷ミュージアム・産経新聞社・京都新聞。